

弱さの美学

The Power Of Empathy

永田円了



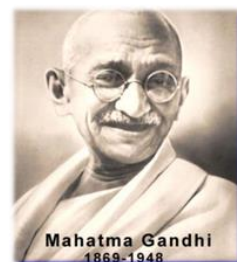
競争社会では誰もが自分の強さを誇示したがる。学歴、地位、財産、名誉など、他人よりも強く、自分がより勝っているということが、人間にいかにも快樂を与えてくれるかということは、計り知れない。強くなければ生きる資格はない、という暗黙のルールが人々の心を縛っている。この講座の用語でいうなら、人間は”マインド”の支配下にある限り、強さ指向の呪縛から逃れることはできないのである。

外向的 vs.内向的

現代社会では、外向的な人がより出世をする。逆に内向的な人は、引っ込み思案で人付き合いも悪いと言われる。学校でも生徒は、より外向的になるように教育される。内向性は弱く、ネガティブな意識だとして改められる。このように教育の分野でも外向的な「強さ」が育成され、みんなの輪にうまく入れない内向的な生徒たちを、なんとか輪の中に入れようとする。果たして、内向的な人は社会的に劣る人なのだろうか？

恥ずかしがりやイコール内向的ではない。前者は、外の目を気にする。自分がどう思われるのだろうかばかりを気にして、自分をうまく表現できない人をいう。後者は、関心が自分の内側にあり、外の刺激を避け一人で物思いにふけったり、本をよんだりで過ごすことを好むタイプである。

外の目、世間の目を気にするという点でいうなら、程度は異なれ、恥ずかしがりやの性質は全ての人にあってはまる。一方内向的な人は、人生を深掘りする気質なので歴史にも多くの名を連ねる。マハトマ・ガンジー、エレノア・ルーズベルト、ダーウィン、モーゼス、ジーザス、ブッダ、これらはTED スーパープレゼンテーションで挙げられた人物である。



これらの人物に共通に言えることは、人生を静かな環境のもと、一人でじっくり考えたということである。人との競争で自分の優位を示すことより、自らの内側で何が起きているのか、に関心があった。自分自身の意識の有り様を探ることによって、本来のありのままの人間の姿を求めたのである。

ありのままの自分



権力欲にしがみついた人間が迎える結末は侘びしいもの。栄枯盛衰、人には必ずその地位を去らねばならない定年や、老年期がくる。その時こそ、本当の自分の姿に出会う。人間は、本来弱き生き物である。生まれたばかりの赤ちゃんのとき、年老いて自分の力だけでは生きて行けなくなったとき、人は無力さを感じ、本来の人間の姿を自覚する。人間は一人では無力な存在

であることを。

弱さは、自分が他人を必要としていることを教えてくれる。

弱っているとき、人は助けを求め。その過程を通して、人は謙虚になり、成長をする。

<事例 DVD>

- NHK ファミリーヒストリー「高橋克典〜特攻を覚悟した父、絶望の中で音楽と出会う〜」 2013/1/7
- 秋山 咲恵、行き詰まり、富士山を見に行く／自らの仮面を脱ぐ
- 鷲田清一／病院での出来事、弱者が自分の役割を見つけたとき動き出す
- ライオン vs. バッファロー／動物が群れるのは、弱い者を守るため
- ギンガメアジのいたわり／海の中でも弱さの美学が健在
- NHK プロフェッショナル・茂木健一郎／自分をさらけ出せない理由
- 映画「二十四の瞳」
- クローズアップ現代「弱く、美しい者たちへ〜今、世界が注目 映画監督・木下恵介」 2013/1/17
- スーパープレゼンテーション「内向的な人、外向的な人」 2012/6/11
- 『弱さを強みに』視点・論点「発達障害の特性を生かして」 鈴木慶太（元NHK アナウンサー）
- 歌・「七つ水仙」プラザーズフォー／人間の外面の弱さ、内面の強さを表現